

『災厄を生きる：物語と土地の力 東日本大震災からコロナ禍まで』

村本邦子*編、鵜野祐介**ほか著、国書刊行会、2022 年

石 井 正 己†

2001 年、立命館大学大学院の応用人間科学科に対人援助領域が創設された。10 年後に東日本大震災が起これ、対人援助学による「東日本・家族応援プロジェクト」を始動させる。言うはやさしいが、京都から東北を訪れて活動を持続するのは容易ではない。私は東京から 40 年以上東北に通ったが、関西と東北では人々の気風がずいぶん違うこともある。それでも、11 年間に 200 人を超える教職員と大学院生がプロジェクトに関わった。しかし、2020 年春から、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が始まる。そこで、コロナ禍を包摂して「災厄」と呼び、プロジェクトを 1 年延長して完結させた。

この間、3 冊の書籍が出ている。村本邦子ほか編『対人援助学を拓く』（晃洋書房、2013 年）では、発達や身体などの障害をもつ人への対人支援が議論される。望月昭ほか編『対人援助学の到達点』（晃洋書房、2013 年）では、地域・福祉・学校の臨床現場で課題が深められる。そして、村本邦子ほか編『臨地の対人援助学——東日本大震災と復興の物語』（晃洋書房、2015 年）では、東日本大震災の支援活動の経過が述べられる。そうした蓄積を経て、プロジェクトの総括として本書が刊行された。

こうしたプロジェクトは、終了時に報告書を作成して、ネット上に掲げてよしとするのが、今では常道になっている。その方が手軽に読めるという意見もある。しかし、そうではなく、誰もが読みやすい書籍として刊行し、社会に発信するという選択をした。出版しなければ、関心を持って検索する研究者しか読むことのない文章になる。情報としてではなく、メッセージとして 11 年間の成果を伝えるのに、書籍という媒体が果たす役割は大きい。全体は、次のような 9 章からなる。

第 1 章の村本邦子の「被災と復興の証人になるとはいかなることだったのか」は、本書の導入にもなっている。関係者の多くは阪神淡路大震災の経験者であり、西洋由来の心理療法は後方支援になじまないという認識があった。その上で、この間に起こった沿岸部の変化をまとめるが、原発事故を抱えた福島の実状は複雑だった。そこで、「政府やマスコミが語る大きな物語ではなく、現地に行かなければ聞こえてこない小さな声に耳を傾け、なるべく多様な物語を集積しようと努力してきた」（42 頁）という。それこそが証人になるといったと知られる。

* 立命館大学大学院人間科学研究科教授

** 立命館大学文学部教授

† 東京学芸大学名誉教授

ishiim@u-gakugei.ac.jp

第2章の団士郎の「十年間、五十回以上開催のマンガ展が生み出した必然と偶然」は、パネルによる家族マンガ展を開催し、配布するための文庫版「木陰の物語」を1万部制作した記録である。2012年の大船渡での参加者は1名だったなどというのは、むしろ貴重な証言である。しかし、一方で、このマンガ展はニューヨーク・台北・上海といった海外での開催に展開する。これについて、「被災地だけが変化していくのではなく、あらゆることが変化してゆくことを実感させられる事態だった」(63頁)と述べる。災厄で多くが失われたが、生まれるものも大きいことを再認識する。

第3章「災厄を生きる三陸沿岸の『土着の知』」の著者・河野暁子は、海外の紛争地や被災地で活動してきたが、村本邦子に出会ったことで、大船渡市に住んで大学院で学ぶことになった。その結果、一市民であり、研究者であるという内部と外部の視点を持つ。陸前高田市の漂流ポスト、大槌町の風の電話をあげ、「口寄せやお祭りなどの慣習が残っている地域だからこそ、死者と生者が出会う新たな空間が、自然と受け入れられたのではないかと思われた」(97頁)ととらえる。それぞれの地域には土着の知があることを認識しないかぎり、対人援助はうまくいかないという認識を深くする。

第4章の鶴野祐介の「『災厄の民話』を〈語り－聞く〉ことの意味」は、みやぎ民話の会の小野和子に焦点をあてる。小野は、戦争に翻弄された経験から、信すべきものを探し、民話に出会う。各地の語り手を訪ねて民話を聞くことを、「採集」ではなく、「採訪」と呼んだ。一人の語り手の世界をまるごと聞くことを重視した。「『ノンフィクション』であることにこだわり、『暮らし』から切り離して『採集』された『語り』には、もはや語り手の『いのち』は宿っていない」(134頁)と考えたからである。震災後すぐに経験者の話を聞くことに動いたのは、実に自然なことだった。

第5章の藍原寛子の「福島の子どもの甲状腺がんの子どもたちに寄り添う人々」は、福島県の甲状腺がんの実態と向き合う。甲状腺がんが多発している、原発事故との因果関係は考えにくいというのが公式の見解であるが、2022年2月までに266人の患者があり、222人が手術を受けている。しかし、実名でメディアの取材を受けている人は皆無である。罹患したことが知られるとどんな不利益が生じるかわからないからで、実際、被害者が語ることへの圧力や批判がネット上に散見される。そこから、「チェルノブイリ原発事故で明らかになった内部被ばくの問題が、福島原発事故では認められないのはなぜか。患者の支援、救済が進まないのはなぜか」(162頁)という憤りが生まれる。

第6章の河野暁子と村本邦子の「福島第一原発事故の記憶はどのように構築されていくのか」は、原発事故の記憶を継承するためのメモリアル・ミュージアムの創設をたどる。震災以来、被災地では複数のミュージアムが創設されたが、この間に創設されたミュージアムは、行政と民間に大別され、「公的なミュージアムと廃炉資料館が回復の記憶を作り出す一方で、民間のミュージアムが、それぞれの視点から喪失を扱っている」(187頁)と分析する。比較されるのはチェルノブイリ・ミュージアムで、そこでは回復や復興ではなく、喪失の記憶を展示して、多言語で解説していた。それは原発事故を人類普遍のテーマだと考えているからだとしている。

第7章の増尾佳苗の「災害援助者(DMAT)が臨地から学んだこと」は、多賀城市で3日間、災害医療派遣チームDMATの救援活動に看護師の立場で携わった記録から始まる。その後、著者は『臨地の対人援助学』を読んで大学院に進み、「東日本・家族応援プロジェクト」に参加することになる。その結果、「専門的な知識や経験で切り込むのではなく、出会いがもたらす被災者の語りや反応を受け止め、応答する相互性を中心に援助を編み出していたのではないか」(210頁)と気づかされる。対人援助が相互性や関係性の中で成り立つという認識は、やがて新型コロナウイルス感染症

への対応へと展開する。

第8章の中村正の「プロジェクトにおける『家族応援』の意味と『お父さん応援セミナー』の取り組み」は、このプロジェクトが掲げた家族応援の実践として、青森県で行ったお父さん応援セミナーの記録である。家族は対人援助学が早く抱えていた課題だった。阪神淡路大震災や東日本大震災をはじめ、大災害後にDV・虐待・性暴力が増加することは、世界各地から報告されていた。著者は「災害後の家族を見通して日常生活からできることをする、これが日常からの後方支援としてのお父さん応援セミナーの目的であった」（255頁）と述べる。ここでは、改めて、日常の持つ意味が意識化されている。

第9章の村本邦子と宮崎康史の「証人たちの学びと成長」は、このプロジェクトに参加した大学院生169人のアンケートの自由記述の分析である。プロジェクトの中心にいる村本とプロジェクトをまったく知らない宮崎が、それぞれに記述を分析するという方法をとった。村本は、「私を主語にしてプロジェクトに参加した自分の経験を物語ることで当事者意識が形成されていた」（267頁）と評価する。一方、被災の経験の当事者意識を持つことが難しく、考えること自体から逃げていたと感じている宮崎は、「専門性の共同構築と脱構築の繰り返しにこそ専門性があるとの理解が証人であることと結び付いた時に、トータルな物語として語られてゆくのではないかと予測される」（291頁）と考えた。2人の立場は異なるが、近い認識を得ていることがわかる。

こうして見ると、本書から、「証人になる」というフレーズが浮かび上がる。村本は、「証人とは一定の距離を保ちながら当事者であり続けようとする意志であり、災害が往々にしてもたらず断絶を埋め、人々の関係をつなごうとする者であった」（9頁）と定義している。対人援助学は、災害の現地に行くことによって、さまざまな課題と向き合うことになり、研究の方法の更新を迫られた。そこから「証人になる」という認識が生まれる。さらに「当事者意識が形成される」と言い換えて、隣接諸学問に接続する。それは、確かに、大きな成果であった。

だが、プロジェクトに関わった人々こそが深く認識していると思われる2つの課題が残されている。1つは、プロジェクトが終わっても、被災者は当事者であり続けることをやめられない現実があることである。それは、他所へ移住したとしても変わらず、意志によって決められる問題ではない。一方、時の経過とともに、証人であり続けることは困難になってゆくことが予想される。今年1月に発生した能登半島地震を見てもわかるように、災害大国の日本では新たな被災者を生み、新たな証人が必要になっている。だが、一時の興奮を超えて、その関係を持続することは容易でない。

もう1つは、第5章や第6章で知ったように、福島も、そして、日本も、いまだ原発事故の渦中にあり、回復や復興を語ることはできない現実がある。実際、今も原子炉の燃料デブリの取り出しがまったくできず、廃炉は計画のまま宙づりになっている。現在の技術で廃炉が難しいことは誰もが知っているにもかかわらず、それを脇に置いて、空虚な物語が語られ続けている。寺田寅彦は、文明が進むほど災害は甚大になり、復興が困難になると述べているが、それは原発事故にこそよくあてはまる。

おそらく、国際化と情報化が急速に進んだ現代社会では、災害・感染症・戦争のどれをとっても、誰もが当事者になる。もはや、被害者と加害者という二分法は成り立たない。そんなときに、本書を読むことで、私たちは報道では知ることのない「小さな物語」をたくさん知り、災厄を生き抜くための知恵を得ることができる。それ以上に、抱え込んでいる課題を鮮明に認識することができる意義はとても大きい。問題解決というより、問題発見の1冊である。